

# 家庭科の保育領域におけるふれ合い体験学習の効果に関する研究

柴 静子 一ノ瀬孝恵 日浦美智代 藤井 志保  
鈴木 明子

## はじめに

ここ数年にわたり、少子化対策に取り組んできた政府は、それまでの成果を踏まえて、2003（平成15）年7月に「次世代育成支援対策推進法」を制定し、次代の社会を担う子どもが健やかに生まれ、育成される社会の形成を目指している。東広島市においては、この法律を受けて、2004（平成16）年11月に「東広島市次世代育成支援行動計画（素案）」を作成し、家庭、学校、職場など地域社会での協働のもとで、母子保健・児童福祉・教育や子育て支援を積極的にすすめるための環境整備に着手した。

当計画の最も基本的な考え方は、住民のライフステージに応じた保健・医療・福祉の総合的なサービス体制の充実である。例えば、中・高校生期には「自立支援と次代の親の育成」が基本目標とされ、青少年が自立した個人として社会の一員となり、そして次代の親となるために、学校教育や地域でのさまざまな体験活動を通して、心豊かに成長することができるよう、関係機関が連携して取り組むことが目指されている<sup>1)</sup>。

取り組みの一つとして、高校生のための子育て体験学習が計画されており、乳幼児とふれあう学習プログラムの開発・活用を検討するとともに、保育所・幼稚園との連携のもと、子育て体験学習を実施することが明記されている<sup>2)</sup>。

学校教育において、乳幼児とふれあう学習は、家庭科や総合的学習の内容として、小学校から高等学校まで広く取り組まれているが、その効果を十全に発揮する授業構成については、研究途上であるといえる。さらには、立地条件等、諸般の事情から、乳幼児とのふれあいの機会を設定できない学校において、どのような疑似体験をもたせるべきかという問題も提起される。

本研究は、以上の背景のもとで、広島大学附属三原中学校および同附属中学校の技術・家庭科において計画・実践した、実体験と疑似体験による乳幼児とのふ

れ合い体験学習の実際と効果について明らかにし、教育現場に対してこころの発達を促す学習のあり方を提案するとともに、この学習への取り組みを目指す自治体に対して示唆を与えることを目的とした。

## I 附属三原中学校「技術・家庭科」における幼児とのふれ合い体験学習の実際と効果

### 1 附属幼稚園との連携によるふれ合い学習の実際

広島大学附属三原中学校の「技術・家庭科」において、藤井志保教諭が取り組んだ2004年度の幼児とのふれ合い体験学習の概要を次に示す。

この学習の対象者は2年生A組42名、B組41名の計83名であった。まず、4月に始まった最初の学習で、これまでの成長を振り返らせることによって、子どもの成長や生活は家族やそれにかかわる人々に支えられてきたことに気づかせ、自分自身もまわりの人々を支えていこうとする意識を芽生えさせた。

その後、6月17日にA組、翌日にB組が附属幼稚園に出向き、あらかじめ決めていたペア幼児（4才児）と約1時間にわたり交流した。その内容は、中学生とペア幼児がお互いに自己紹介をし、一緒に遊び写真を撮るといったものであった。事後の取り組みとしては、①ペア幼児との写真を入れた掲示物を作り、家庭科室に掛けておく、②ペア幼児にカードを作って幼稚園に届ける、③幼稚園訪問の感想と幼児のイメージに関するアンケート調査を行うという3つを実施した。

9月12日に実施された附属三原学園の運動会では、幼稚園・小学校・中学校合同の種目「アンパンマンワールド」に園児と児童・生徒と一緒に出場して、楽しみながら交流を深めた。

運動会が済んで、ペア幼児に読み聞かせをするための自作絵本の製作に入り、それが完成した12月22日には、読み聞かせの指導とともに、幼児との言葉の応答の方法について学習させた。後者については、宮原和子・宮原英種氏の『知的好奇心を育てる応答的保

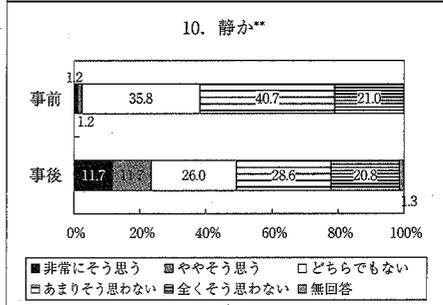
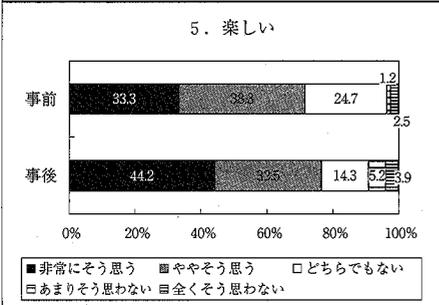
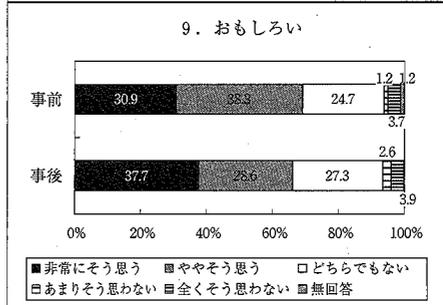
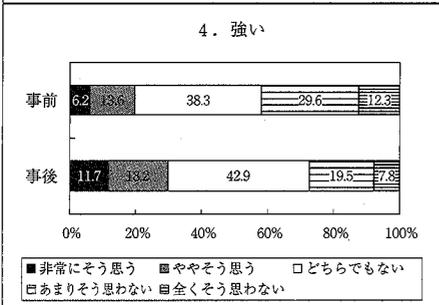
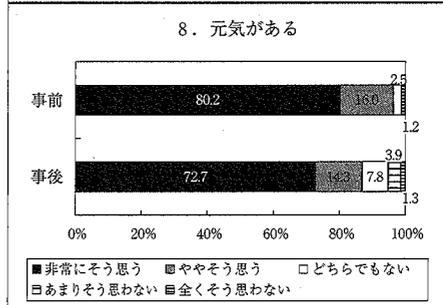
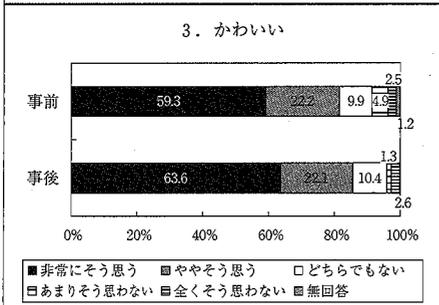
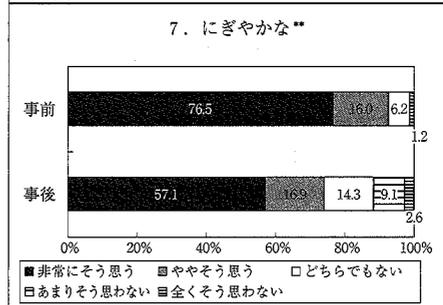
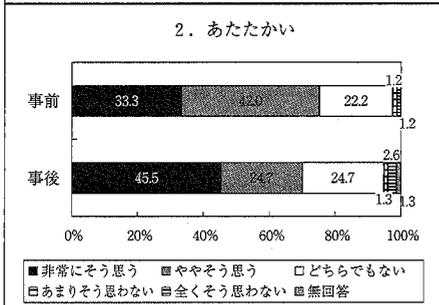
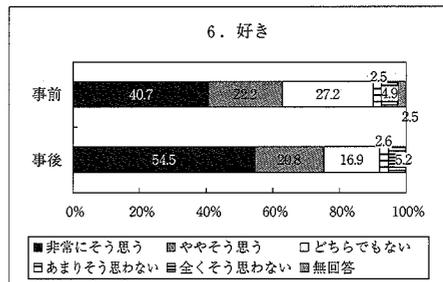
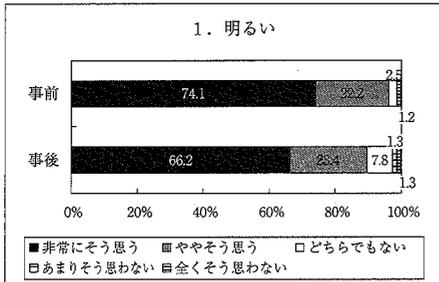


図1 最初のふれあい学習の事前・事後のイメージ変化

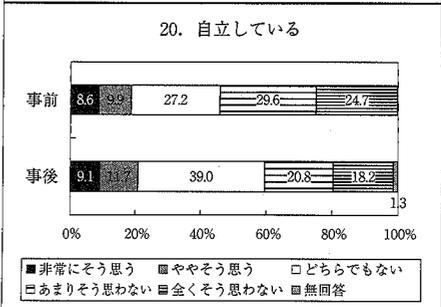
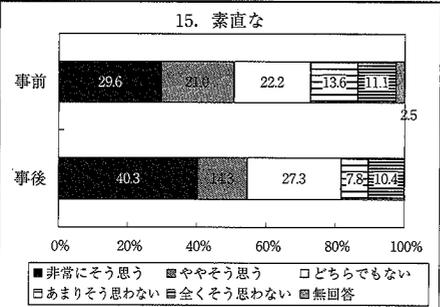
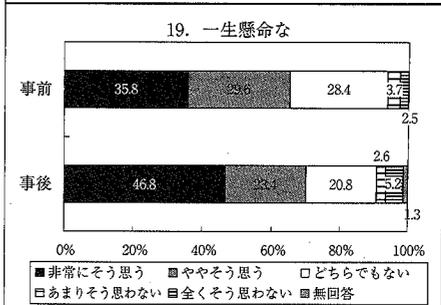
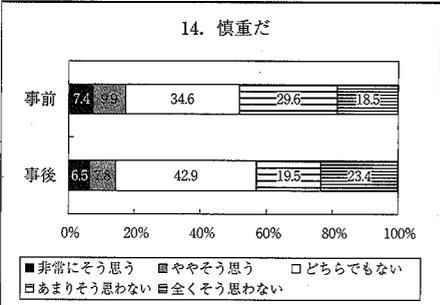
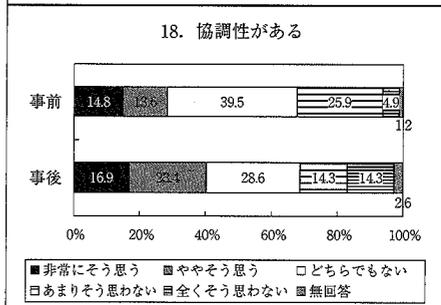
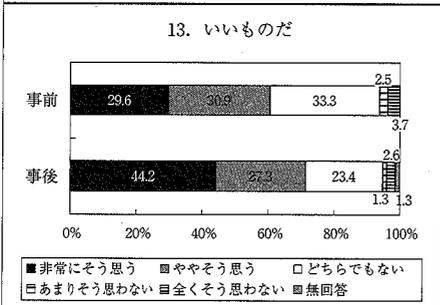
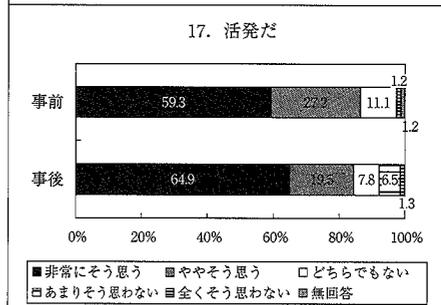
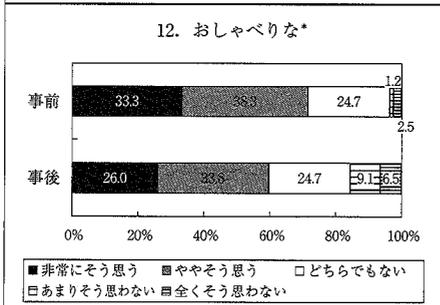
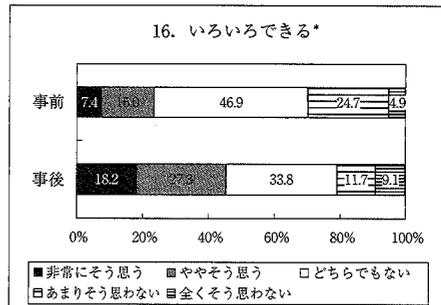
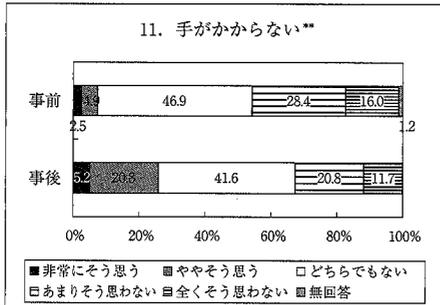


表1 ことばによる応答の授業実施後の意識

	2 A	2 B	2 A	2 B	2 A	2 B	2 A	2 B
① ことばによる応答の3つの「問いかける・受けとめる・道すじをしめす」の意味が分かりましたか。	◎ (大変よく分かった。とても積極的に取り組めた。)		○ (分かった。積極的に取り組めた。)		△ (あまり分からなかった。積極的に取り組めなかった。)		× (全く分からなかった。全く取り組めなかった。)	
	31人	24人	9人	15人	1人	0人	0人	1人
合計	55人		24人		1人		1人	
② グループでのことばによる応答を積極的に取り組みましたか。	32人	24人	8人	11人	0人	4人	1人	1人
合計	56人		19人		4人		2人	
③ グループでのことばによる応答でよかったことはどこですか? 例～さんの～ということばがよかったなど・・・	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aさんの「あめちゃん何色だった?」「そうか、それじゃあイチゴ味かもね」というところ、Bくんの「そうか、じゃあ飛行機かな?」という言葉。</li> <li>・ Dさんの「えーと、誰か忘れてる」のところがよかった。</li> <li>・ EさんとAさんのあめの色について、「赤だったの、じゃあイチゴ味かな?」というところが道すじがどんどん開けていてよかった。</li> <li>・ Fくんの『小鳥さんみたい』という言葉がとっても世界に入っていてよかった。</li> <li>・ 「ああそうなんだ」という応答がよかった。</li> <li>・ Gさんの名前を言って5人だねと言ったところがよかった。</li> <li>・ Hくんの『よく知っているね。』と幼児をほめることで話しを引き出そうとしている。</li> <li>・ Iくんの『先生もみきちゃんとお話したいな。』です。</li> <li>・ Jくんの『そうすごいね』の応答がよかった。</li> <li>・ Kさんの『ふーん』という言葉がよかった。</li> <li>・ 『エー10回ものったんだ。』</li> <li>・ 「へえーしたんだ」という受容。</li> <li>・ 久保長くんが「～だったの」という応答がよかった。</li> </ul>							
④ 1月に園児さんと話すときに、ことばによる応答を意識してみようと思いますか?	はい		いいえ		分からない			
	35人	35人	1人	1人	5人	4人		
合計	70人		2人		9人			
理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話しやすそう、分かりやすそうだから (11)</li> <li>・ 今日学習したから (3)</li> <li>・ あまり話さない子なので (4)</li> <li>・ 話しをふくらませたい、はずませたいから (13)</li> <li>・ 勉強したことをいかしたい (1)</li> <li>・ 色々なことが聞けそうだ (5)</li> <li>・ 話してくれたら嬉しい、楽しいから (8)</li> <li>・ 仲良くなれそう (4)</li> <li>・ やってみたい、どれだけ会話がはずむか試してみたい (6)</li> <li>・ 何事も実践あるのみ (1)</li> <li>・ 幼児と視線を同じにするために (2)</li> <li>・ やってもよい (1)</li> <li>・ ことばのキャッチボール、応答は大切 (2)</li> <li>・ かがみっぽくしたい (1)</li> <li>・ なんとなく (1)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 面倒くさい</li> <li>・ 頭がこんがらがる</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ いつもやってない会話なので出来ないかもしれないから</li> <li>・ 本番で出来るかどうか分からない</li> <li>・ グループワークのとき記録係だったから</li> <li>・ 先のことだから</li> <li>・ 忘れてるかもしれない</li> <li>・ 普通に話しても反応するから</li> </ul>		2 A 41人 2 B 40人 2 学年計 81人 欠席 2人	

<p>③今日の授業の感想を書きましょう。</p>	<p>2 A</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・始めて、応答について知って、子ども番組とかでも応答しているなあと思った。小さい子のお母さんもしているなあと思った。これから交流するときに使っていきたい。</li> <li>・自分が小さい子になって話すのはとても難しかった。過程が出来なかったので、1月にはやってみたくて思いました。</li> <li>・幼児には、発問するばかりでなく、受容してあげることがいいということが分かった。そして、会話に過程を入れるということは難しいんだと思いました。</li> <li>・子どもに応答するのはとても難しい。</li> <li>・園児さんとの会話をするときのためにいい学習になった。とても楽しかった。</li> <li>・発表の時、少しあがったけど上手くできた。Fくんすごい！</li> <li>・それぞれの班で色々な会話があったけど、どれも園児さんのことを意識して考えてよかったと思う。</li> <li>・会話の時に足りていたので、とてもすばらしい発表が出来ました。園児さんとの交流に生かしたいです。</li> <li>・今までは、幼児さんと会話するときに別に意識せずに会話していたけど、今日学習した「発問」「受容」「過程」に気をつければもっと会話を膨らませることが出来るので頑張りたいです。</li> <li>・なかなか興が深かった。</li> <li>・話すことについて考えられたのでよかったと思う。</li> <li>・ちょっとした会話の中にも楽しくするための工夫があることが分かったのでこれからの会話で使ってみたくて。</li> <li>・発問・受容・過程についてよく分かり、幼児たちにも試してみようと思った。</li> <li>・過程を作るのが難しかったけど、次は何とか出来そうです。</li> <li>・今日は、幼児役だったんだけど言葉っておもしろいなあと思いました。他の班もとてもいろんなことを考えていてすごいと思った。</li> <li>・今まで幼児と交流するとき会話が成り立たなくて困ることが多かったので次の交流の時役立てようと思いました。</li> <li>・すごくおもしろかったです。私には年下の妹がいないのでふだんからそういうことに気づけなかったけど、今日授業でやれてとても嬉しいです。</li> <li>・とても楽しかった。みんな幼児になりきっていてとてもおもしろかった。</li> <li>・過程の意味が分かりにくかったけど、積極的に取り組むことが出来ました。</li> <li>・言葉の応答はとても大切で、子どもが成長していく上でとても大切なことだと思いました。自分達で足りてやるのは難しかったです。</li> <li>・今日は恥ずかしいこともあったけど、結構役に立つことをやったなあと思った。</li> <li>・あまりおもしろく感じられなかった。</li> </ul>
	<p>2 B</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・過程を入れると、話しも膨らんでコミュニケーションになると思った。</li> <li>・応答の勉強をして、子どもへの接し方が少し楽になった気がしました。</li> <li>・使ってみようと思った。</li> <li>・みんなの会話を聞くのが楽しかった。</li> <li>・受容してあげると話しやすくなるんだと思った。</li> <li>・幼児のことにばに反応するのは難しいと思いました。</li> <li>・応答の学習をしましたが、私は過程が苦手なんだと分かりました。次の園児さんとの交流ではそこに気をつけたいと思いました。</li> <li>・今までは考えたこともなかったけど、次の交流で頑張りたい。</li> <li>・幼児に対しての話し方がすごい分かった。これを今度の訪問の時に生かしたい。</li> <li>・幼児の役は意外と難しかったです。</li> <li>・今度話すとき、いきづまったときとつきに出来るように意味を理解しておきたい。</li> <li>・子どもと話すのは結構時間がかかるなあと思いました。</li> <li>・幼児と話すときのこつがつかめてよかった。</li> <li>・今日は色々なことをやったけど、幼児さんが「どのような態度をとれば話しやすいのか」が分かった。こんどやってみよう。</li> <li>・発問や受容、過程で幼児さんの言ったことをどんどん広げていくのは難しいと思った。</li> <li>・やりにくくて難しかった。でもためになった。</li> <li>・ビデオはとても勉強になった。応答とはとても重要なことだと思った。</li> <li>・過程が大切だと知ったので、次は頑張ろう。</li> <li>・私は、園児さんとの応答は苦手なだけで頑張ってみようと思った。</li> <li>・今日は始めて知ったことばかりでびっくりした。1月にはちゃんと実践したい。</li> <li>・とても分かりやすく、理解しやすい内容だったが結局あまり分らなかった。</li> </ul>

育<sup>3)</sup> およびこれに対応したビデオ（ジエムコ出版発行、2004年）を使用したり、グループワークによるシナリオ作成と劇化によって、言葉の応答とは、「問いかける（発問）・受けとめる（受容）・みちすじをしめす（過程）」というコミュニケーション過程であることを理解させて、幼児との交流に生かすように指導をした。

2005年1月19日にはA組が、翌日にはB組がペア幼

児に自作絵本を読み聞かせて、最後の交流とした。

## 2 附属三原中学校のふれ合い体験学習の効果

技術・家庭科における幼児とのふれ合い体験学習のあるべき姿を求めて、2004年度は先述のような構造をもつ一連の取り組みを実施した。この結果、次の点において効果が見られた。

第1は、図1のイメージ調査の結果が示すように、

交流学習の事前に生徒が持っていた、幼児に対するイメージは1時間の交流を経て僅かに変化し、「幼児は思ったほどにぎやかではなく静かにすることができる」(項目7・10)、「考えていたほどは手がかからず、いろいろなことができる」(項目11・16)という幼児理解の方向が芽生えてきたことがあげられる。これは $\chi^2$ 有為差検定の結果(※は5%、※※は1%の危険率)が示すところである。

第2は、表1が示すように、幼児にどのような言葉をかければよりよくふれ合えるのだろうか、という中学生の不安を解消する手立てとして、「ことばの応答」についての学習が有効だということである。

第3は、図2が示すように、最初の授業に入る前に中学生がもっていた幼児へのイメージは、絵本の読み聞かせを終えた時点で、「幼児はあたたかく、おしゃべりもするが静かにすることもでき、まわりと協調しながら、一生懸命に生きている。思っていた以上に強いところもあって、いろいろなことができ、結構自立してて手がかからない。いいものだ。」という具合

に、深い理解の方向に変化したということである。

なお図2は、幼児への20項目のイメージを「5：肯定」、「4：やや肯定」、「3：普通」、「2：やや否定」、「1：否定」の5段階で尋ね、「5と4と答えたものを肯定」、「3と答えたものを中間」、「2と1と答えたものを否定」として、それぞれに5点、3点、1点を乗じて各項目の総得点を出し、人数で割って平均点を算出したものである。 $\chi^2$ 有意差検定の結果は、各項目に付けた※で示した。

以上のように、中学生は幼児と直接的にふれ合うことによって幼児理解が深まるとともに、小さきものの中に力強さを感じ、いいものだと思う感情が醸成されることが明らかになった。また、そのような理解や感情の啓培のためには、幼児とのふれ合いを豊かにすることができる「ことばの応答」の指導が効果的であることが判明した。

それでは次に、赤ちゃん人形を使った乳児とのふれ合い疑似体験学習の実際と効果について、附属中学校の実践に即して考察する。

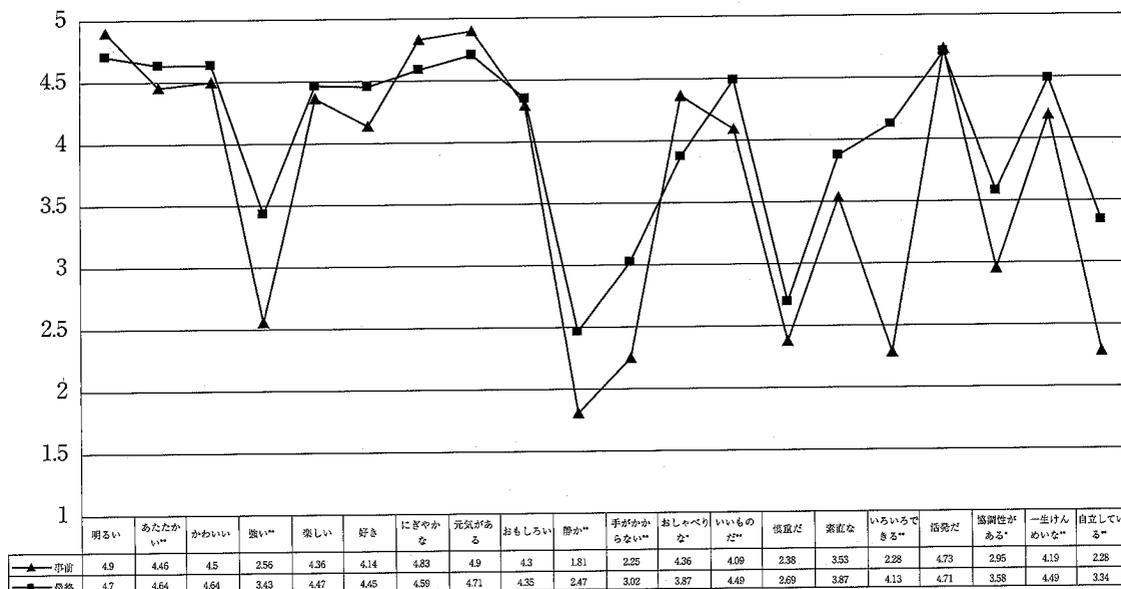


図2 ふれあい体験による幼児のイメージの変化

## II 附属中学校における疑似体験学習「赤ちゃんがやってきた」の実践と評価

### 1 指導のねらい

幼児の発達と家族の学習については、「幼児の観察や遊び道具の製作などの実践的・体験的な活動を通して、幼児期が人間形成の基礎を作る大切な時期であり、遊びを通して成長発達していることを理解し、幼児の

心身の発達の特徴と発達を支える家族の役割について考えることができるようにすること」をねらいとしている。すなわち、自己理解や人間の発達に関する理解に重点が置かれているのであり、家庭科の学習を通して幼児に対する関心が高まるように指導することが求められている。そのためには、保育所や幼稚園などを訪問したり、園児を学校に招くなど、幼児と適切にか

かわれる機会を作ることが大切であると思われるが、近隣に保育施設がない地域や、授業時数削減に伴う限られた時数の中では、そのような機会を持つことはなかなか難しい。附属中学校でも今までに数回、徒歩15分の場所にある保育所の訪問を行ってきた。訪問に際しては、保育所の行事関係を考慮し、さらに本校の行事や時間割を考え都合のよい日を設定してきたが、時間の調整がなかなか難しく、近年は、夏休みに希望者のみ訪問するという形態をとらざるを得なくなっている。

そこで、この度の研究では、幼児とのふれあいの機会を設定できない場合の擬似体験的学習として、幼児ではなく乳児である赤ちゃん人形に接触させる場面を設定し、その人形を通して自分の発達や人とのかかわりを学んでいくことができるかどうかを検証することとした。

実験授業は、広島大学附属中・高等学校の中学3年生1クラス（男子20名、女子19名）を対象として実施した。実施機関は2004年7月12日～9月27日のうち全6時間であった。授業者は同校教諭の一ノ瀬孝恵であった。

## 2. 指導計画（全6時間）

- 第1次 赤ちゃんのイメージと赤ちゃん登場…2時間  
第2次 VTR「生命誕生」視聴 ……………1時間  
第3次 「赤ちゃんがやってきた」のシナリオづくり  
と発表、まとめ……………1時間+課外

## 3. 指導の内容

上記の指導計画の中から、今回は第3次を中心に授業の展開を報告するが、第1次から第2次についても簡単に触れておく。

第1次では、まず「赤ちゃんのイメージ」について、18項目のアンケートを行なった後、クラスの生徒を男女混合で5つの班に分けて座らせ、それぞれの班を一つの家族と仮定した。続いてすぐに、5体の赤ちゃん人形のうちの1体を教師が大事に抱っこしながら登場させた。赤ちゃんは生まれたときの平均体重と同じ重さであることを知らせ、各班の生徒の代表者に赤ちゃんを連れに来るように指示し連れて帰らせた後、全員に赤ちゃんを抱いたりさわったりさせた。その際、赤ちゃんを大事に扱うよう指示した。またその後、生徒一人ひとりに小さな色カード10枚ずつ渡し、「赤ちゃんと聞いて思いつく言葉」を各自1枚のカードに一つの単語を書いていかせた。

続いて、カードに書いてある言葉の似たもの同士を集め、各班で工夫を凝らしながら模造紙に貼りつけさ

せた。その際、同じ言葉のカードがあった場合は重ねていくこと、分類しにくい1枚だけの言葉も大切にすること、まとまりごとに最も適切な見出しを考えて記入すること、模造紙には、班員の名前を書いておくこと、赤ちゃんには名前をつけ、その名前も書いておくことを指示した。（7月12日、1時間）

第2次では、前回作成した赤ちゃんのイメージマップを被服教室に貼りだし、イメージの紹介を教師がした後、受精から赤ちゃんが誕生するまでを描いたVTR「生命誕生」を視聴させた。（9月6日、1時間）

第3次は、赤ちゃんがやってきて、名前も決まり、これから家族の一員としての生活が始まることになったことを告げ、赤ちゃんが生まれたことで生じるさまざまな問題や、育児上興味のあることを各班で一つテーマとして取り上げさせ、調べ学習をさせた後に、その結果を盛り込んで、赤ちゃんが家族の一員になった喜びと戸惑いを含んだシナリオを作らせた。テーマは、教師が準備した8つの中から選ばせた。そのときにつけた条件は、次のようなものである。

- ① 父・母・祖父・祖母は必ず登場させること。
- ② 5分くらいで紹介すること。
- ③ 夫婦は共働きである。
- ④ おじいさん、おばあさんは同居していない。

また、教師が準備した8つの調査テーマは、

- ① 食事（ミルクや離乳食）の与え方。
- ② おむつについて。（布おむつと紙おむつ）
- ③ 乳幼児の服装について。
- ④ 赤ちゃんをどこ（誰）に預けるか。
- ⑤ 乳幼児の遊びについて。
- ⑥ 乳幼児の体の発育について。
- ⑦ 乳幼児の運動機能の発達について。
- ⑧ 乳幼児のことばの発達について。

であった。シナリオを授業時間内に作ることでできなかった班は、その日の放課後を利用して完成させた。

シナリオは、各班5分をめぐりに、劇化して発表させ、その後、教師が用意した資料プリントを用いて乳幼児についての理解を深めさせた。（9月21日、1時間、27日2時間）

### (1) 第3次の目標

- ① 調査活動をすることで、乳幼児の特徴を理解するとともに、かかわり方を考える。
- ② 赤ちゃん人形を中心にしたシナリオづくりを通して、自分の発達や人とのかかわりを学ぶ。

### (2) 授業の流れ

1班8人で作ったシナリオを劇化し、それを各班5分程度で発表を行なわせた。5つの班が考えたシナリオのテーマと授業の流れは次のとおりである。

① 1班のテーマ：「赤ちゃんをどこに預けるか」

登場人物は、父、母、兄、姉、祖父、祖母と真理と命名した赤ちゃんの7人で、共働きの夫婦が、育児休業も終わりに近づき、赤ちゃんの預け場所を考えている場面を表現したものであった。以下にシナリオの内容を示す。

〈シナリオの内容〉

祖父「うわあ、かわいいのう。目に入れても痛くないわ。何ていう名前なんじゃ？」

父「真理っていう名前にしたんです」

祖父「いい名前じゃのお。真理、おじいちゃんだぞ」

真理「わあ～ん」

～6ヶ月後～

母「そろそろ育児も終わるけど、真理をどうしましょうか」

父「そうだなあ、保育所に預けるのはどうだ。俺の周りの人もみんなそうしているし」

母「でも、保育所って、近くにないわよ。おじいちゃんとおばあちゃん家に預ければ、便利で楽よ。」

父「でも、迷惑になるだろう。保育所のほうがいいと思うよ。」

子「僕はおじいちゃん家に預けたほうがいいと思う。」

子「そうだよ。おじいちゃんおばあちゃんもきっと喜ぶよ。」

父「そうか。それもそうだな。」

母「じゃあ、電話して聞いてみましょう」

祖父「もしもし」

母「お父さん、元気？」

祖父「おお、元気じゃよ、ところで孫たちは元気にしとるか。」

母「元気よ、それで、真理のことなんだけど。私の仕事もうすぐ始まるから、預かってもらえない？保育所に預けるのも大変だから。」

祖父「じゃあ、ばあさんに聞いてみるね」

母「お母さん、私だけ。真理を預かってもらえないかしら。私、仕事が始まっちゃうの。」

祖母「あ、もちろんいいよ。」

母「じゃあ、来週の月曜日の朝、家まで預けに行くね。」

② 2班のテーマ：「家族会議～子どもの世話は誰がする」

登場人物は、父、母、姉、祖父、祖母、伯母、いとこと赤ちゃんであった。赤ちゃんはきゅうちゃんとなづけた。

内容は、1班と同じく、赤ちゃんの預け先を考え、

話し合いをする場面であった。父、母、祖父、祖母の同居家族で、4人それぞれが仕事を持っており忙しい毎日を送っているため、赤ちゃんを仕事を持っていない伯母に預かってもらえないかとお願いするが、伯母もPTAの役員で忙しくしているからと断られる。結局、保育所に入れることに決定するが、決定するまでに、どこの保育所または幼稚園に預けるかで意見が飛び交った。

③ 3班のテーマ：「紙おむつと布おむつはどちらがよいか」

この班の登場人物は、父、母、祖母、デパートの店員と赤ちゃんであった。

今まで当然のように紙おむつを使っていた母であるが、ある日赤ちゃんの肌がかぶれたことから、おむつについて考えるようになる。祖母に聞いたところ、かつては布おむつしかなかったから、布しか使わなかったという。そこで、母はデパートに行き、店員に尋ねることにした。店員は、紙おむつは使い捨てで便利だけれど、布おむつのほうが肌に優しいと答える。母は、どちらも試してみようとする。

④ 4班のテーマ：「赤ちゃんの服」

登場人物は、父、母、店員、親戚の夫婦、祖父、祖母、ありさと命名された赤ちゃんの8人であった。

生まれた赤ちゃんのために、お祝いを選びに行く親戚の夫婦。洋服をプレゼントすることに決めるが、その色に悩む。結局ベージュの洋服を選ぶ。祖父と祖母も洋服を持って来て祝う。こちらは淡いブルーで、肌触りにもこだわったという。赤ちゃんの洋服選びに大切なことは何かを考えたものであった。

⑤ 5班のテーマ：「赤ちゃんと絵本」

登場人物は、父、母、アナウンサー、祖父、祖母とニックと名づけた赤ちゃんであった。

テレビのスイッチを入れると、天気予報に続き東京株価市場に関するニュースが流れる。天気予報には反応し、株価のニュースには反応しない赤ちゃんのニック。心のこもった接し方が大切だと思った父母は、絵本を感情を込めて読む。実際に絵本「はらぺこあおむし」を読んでいった。

5つの班の発表終了後、乳幼児に関する資料プリント2枚を配布した。この資料は、生徒たちが作ったシナリオにあらかじめ目を通し、補足したいことを中心に教師がまとめたものである。生徒のシナリオ作り際には、生徒たちに調査をさせた上で行なわせたものの、調査時間を十分にとることができなかったこと

からシナリオの内容そのものが説得力に欠けてしまった。

そこで、赤ちゃんの預け先をテーマに選んだ1・2班には、保育所と幼稚園に関することおよびその他の預け先についての資料を提示するとともに、育児休業制度にも触れることができるようにした。また、3・4班に対しては、おむつのことや衣服のことを取り上げていたことから、おむつや赤ちゃん関連グッズに関する資料を与えた。5班の絵本については、その他の玩具について補足した。

教師は、資料プリントに沿って、胎児・乳児期・幼児期と説明をした後、乳児のいる家庭の一日の様子を母親の生活時間を中心に示したり、幼児と中学生の一日の過ごし方を示して、家族の人たちが乳幼児にどのように関わっているかをわかりやすく説明した。最後に、事後アンケートを行なった。

#### 4. アンケート調査にみる生徒の意識

##### (1) 赤ちゃんのイメージアンケート

7月12日の授業開始直後に、生徒の赤ちゃんに対するイメージアンケートを行ない、38名より回答を得た。調査結果は、図3のとおりである。

アンケートの質問は、①明るい(暗い)、②あたたかい(つめたい)、③やわらかい(かたい)、④強い(弱い)、⑤かわいい(にこらしい)、⑥楽しい(つらい)、⑦好き(嫌い)、⑧元気がある(元気がない)、⑨おもしろい(つまらない)、⑩静かな(うるさい)、

⑪手がかからない(手がかかる)、⑫いいものだ(わずらわしい)、⑬素直な(わがままな)、⑭いろいろできる(何もできない)、⑮活発な(おとなしい)、⑯甘える(甘えない)、⑰安定した(不安定な)、⑱依存している(依存していない)の18項目であった。

赤ちゃんのイメージを肯定的な表現から否定的な表現に至る5段階で示し、肯定的イメージを強くもったものに5点、やや肯定的なものに4点、どちらともいえないものに3点、やや否定的イメージのものに2点、非常に否定的なものには1点を与えて得点化し、各イメージの総得点を出して、平均点を算出した。

図3から、学習前の生徒の赤ちゃんに対するイメージは、明るい、あたたかい、やわらかい、かわいい、好き、元気がある、活発な、甘える、依存している、弱い、うるさい、何もできない、不安定であるというものであった。しかし、楽しい(つらい)、好き(嫌い)、おもしろい(おもしろくない)、いいものだ(わずらわしい)、素直な(わがままな)の5つの項目については、どちらともいえない回答となっており、赤ちゃんに対し、あまり好きでない感情を持つ生徒が半数近くいることが分かった。特に男子生徒においては、「好き」は3.43、「おもしろい」は3.3、「いいものだ」は3.48と得点が低かった。

アンケート終了後、各自で「赤ちゃんと聞いて思いつくこと」を10個カードに書かせて、赤ちゃんのイメージを共有した上で、まとめさせたところ表2の結果を得た。

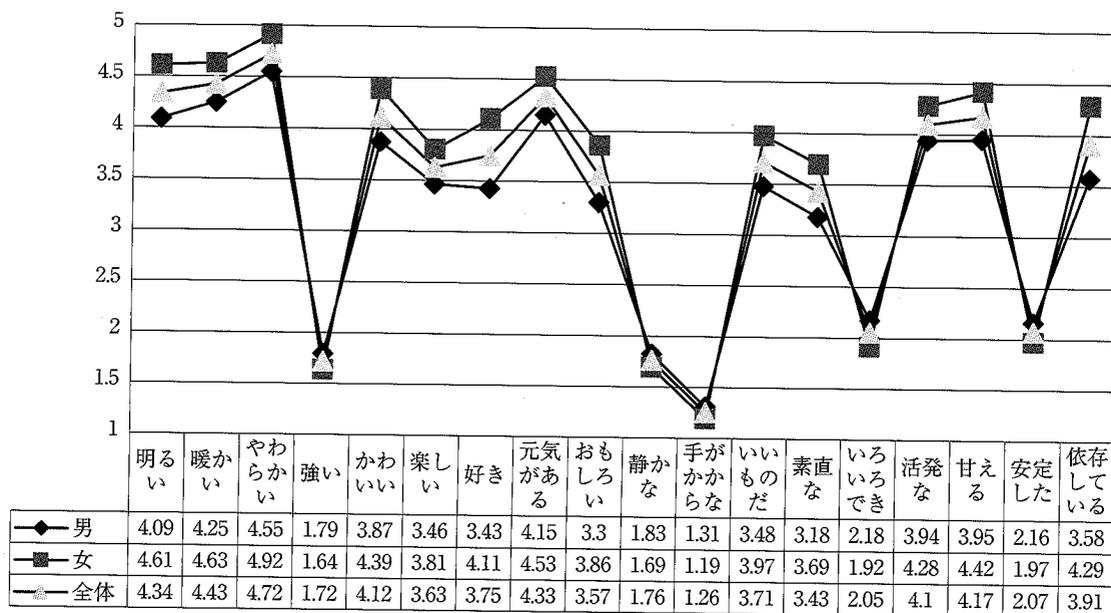


図3 ふれあい疑似体験学習による幼児のイメージの変化

表2 生徒の赤ちゃんに対するイメージ

- ① 赤ちゃんとはとてもかわいいが、よく泣くのでうるさい。しかし、弱いものなので、とてもいいねいに世話をしなさいといけな。 (男子)
- ② よいイメージが多かったのは、かわいい、無邪気だった。悪いイメージが多かったのは、泣く、うるさいだった。全体的に見るとよいイメージが多かったと思う。それだけ赤ちゃんを好きだと感じる人が多いのだろうと思う。(男子)
- ③ 小さくてまるくてかわいらしいもの。でも親は大変である。(男子)
- ④ よく泣いて、よく笑い、よく寝る。かわいいというイメージがあるが、実際は、わがままで非常にうるさく、手間やお金がかかるので、養育するのはとても大変である。(男子)
- ⑤ プラスに評価する言葉が多かった。明るく、活発で元氣、かわいらしいというのが主な理由。赤ちゃんは素直で無邪気なので、人をなごませることができるのだろうと思う。でも反対にうるさいというマイナスの面もある。たしかに、手はかかるが、やはりそれでも赤ちゃんを好きな人が多いということは、赤ちゃんは人々の宝だと思います。(女子)
- ⑥ 赤ちゃんはまたは赤子というように、顔を真っ赤に紅潮させて泣く姿をイメージする。一生懸命なその姿は、生命力の象徴といえる。一般に「弱いもの」と見られがちだが、私はむしろ力強く感じる。(女子)

(2) 授業後のアンケート

全6時間の実験授業後に行った事後アンケートの質問は、「赤ちゃん人形に触れてみてかわいいと思ったか」というものであった。またその理由も述べさせた。

かわいいと思った生徒は、男子15名、女子12名(計27名)で全体の69.2%であり、かわいいと思わなかった生徒は、男子4名、女子5名(計9名)で23%であった。また普通と答えた生徒は3名であった。

かわいいと思わなかったまたは普通だと答えた生徒の理由を表3に、かわいいと思った生徒の理由を表4にまとめた。

表3 かわいいと思わなかった理由

- ① 人形よりほんもののほうがよい。
- ② 人形だと赤ちゃんという感じがしない。本当の赤ちゃんはなぜかわかしい。
- ③ 首がぐにゃくにゃしているところ。
- ④ 動かないから。人形だとわかりきっているから。重たかったから。
- ⑤ 髪の毛が少なく、目がでっかいから。
- ⑥ 目がほんものらしくない。でも存在はかわいかった。
- ⑦ 顔とか、体などがいかにも人形っぽくて実感がわかなかったため、愛着もわかなかった。ただ、重さとかはリアルでよかったと思う。
- ⑧ 首がぐらついて安定感がなかった。
- ⑨ 反応がないし、動きがない。やっぱり赤ちゃんのかわいさは、行動にあると思う。
- ⑩ 人形なので、現実味がなくてかわいいと思えませんでした。
- ⑪ 人形は動かないし話さないからです。

- ⑫ 絶対ほんものの赤ちゃんのほうがかわいいと思います。本物だったら動くし、しゃべるし、その行動ひとつひとつで私のほうも一喜一憂するし。こちらまで気分がほにゃーとなる気がします。だから、人形だったらその気分が味わえないので。表情はひとつだし。

\*①～⑤は男子、⑥～⑫は女子の回答

表4 かわいいと思った理由

- ① とても小さく感触がやわらかかったから。眠っている顔が無邪気な感じだったから。
- ② 意外に重たかったから。初めて赤ちゃんに触れられたから。寝顔がよかったし、いろいろ新しいことを知ったから。
- ③ 本物そっくりで肌触りがよかった。結構頭が重かった。
- ④ ふわふわした感じで自分が守ってあげなきゃという感じがしたから。頼りない感じがすごくかわいい。抱いてみると意外とずっしりしてて、そこがまた大切にしなければなあと思った。
- ⑤ 両腕にすっぽり収まるサイズで、かわいい、肌も柔らかく、抱き心地がよかったです。思った以上に、重くておどろきました。
- ⑥ すべてが小さくてかわいかった。いろいろ大変なことがあるのだと思うけれど、やはり、「かわいい」にはかなわないと思う。
- ⑦ 重さがちょうどいいです。ひざにのせたとき、なんだか安心する重さで、心なしか温かい気もしました。横になって背中に乗せたらもっと気持ちいいだろうなと思いました。
- ⑧ 首が据わっていないところは赤ちゃん特有で、やわらかかったり、寝た顔がかわいいところはかなりひかれます。私の妹が小さかったときの頃を思い出します。
- ⑨ やわらかいし、色使いがパステルカラーでやさしくみえるから。
- ⑩ ふわふわで目がくりくりしていて、手や足が小さいのがとてもかわいい。

\*①～⑤は男子、⑥～⑫は女子の回答

赤ちゃん人形がかわいいと思えなかった理由で多かったのは、反応がないことすなわち、動かないし、話をしないことであった。また、目や髪の毛など人形っぽくて実感がわかなかったことがあげられた。かわいいと思った生徒は、本物そっくりの肌触りや、重量感をあげながら、想像力をふくらませて、生きた赤ちゃんとも重ね合わせていることが窺えた。

5. 赤ちゃん人形を導入した授業の成果と課題

今回の実験授業は、乳幼児とのふれあいの機会を設定できない場合の学習として、赤ちゃん人形を通して自分の発達や人とのかわりを学ぶことができるかどうかを検証したものである。生徒同士で擬似家族を作り、赤ちゃんについて知りたいことをテーマにシナリオを作成させた後、赤ちゃん人形を使用して、家庭での問題シーンを演じさせた。

生徒は、赤ちゃん人形に接して、その重さに驚き、中には、ずっと人形を抱いたままシナリオを考える生

徒もいた。演じるときも、人形を大事に抱っこし、実際には動くことのない赤ちゃんであるが、本物そっくりの肌触りや重さからか、男子生徒が上手にあやすシーンも見られた。

今回の授業クラスで、赤ちゃんに全く触れ合ったことのない生徒が6名いたが、その中の1名は、「初めて赤ちゃんに触れて、かわかった」と感想を書いた。このように赤ちゃん人形は、たとえ人形であっても赤ちゃんに初めて触れる生徒にとって、感動を与えることのできる存在であったといえる。その一方で、かわいと思えなかったと答えた生徒が23%いた。話をしないし、動かないから人形は人形なのだとか割り切ってしまう、想像力をふくらませたり、感情移入ができなかったのであろう。今後、擬似的なふれ合い体験学習を構想する際には、どのように赤ちゃん人形を使用すれば、生徒の人間的な感情の醸成と自らの成長に関する理解の深化に寄与するのかという点から考察を重ねたい。

#### おわりに

家庭科における乳幼児とのふれ合い体験学習の効果を確かめ、そのあり方をより適切なものへと方向付けるために、広島大学附属中原中学校では幼児との直接体験を、また附属中学校では赤ちゃん人形による擬似体験を中心とした授業を構成し、実践して効果を評価した。

研究成果の第1は、幼児との直接的なふれあい体験が中学生に及ぼす影響は大きく、幼児がどのような存在であるかということへの理解が深まるとともに、幼

児に対するイメージを肯定的で良好な方向に移行させることができたということである。第2に、赤ちゃん人形を利用した擬似体験学習は、直接体験学習の効果には及ばないものの、小さきものへのいとおしさやかわいく思う気持ちの醸成に寄与したということである。第3に、生徒は幼児とのふれ合い体験学習に際して、期待とともに不安を抱えており、特にどのようにことばを交わすと幼児に受け入れられるのか、といったコミュニケーションの取り方に関して戸惑いがちであったが、「ことばによる応答」の学習後にはこのような不安が減少したばかりでなく、今後、様々な場面で利用し、まわりの人々との交流を深めたいという意欲をもたらしただことである。

東広島市をはじめとする次世代育成支援事業に取り組む自治体は、以上の研究成果を吟味しながら、乳幼児とのふれ合い体験学習プログラムを構築していただきたいと思う。

#### 注

- 1) 『東広島市次世代育成支援行動計画(仮称)素案』, 2004, p. 2.
- 2) 同上書 p. 27.
- 3) 宮原和子・宮原英種『知的好奇心を育てる応答的保育』, ナカニシヤ出版, 2004.  
応答的保育とは、子どもが環境に働きかけたとき、その環境から返ってくる応答を重視した保育のことである。今回の研究においては、ことばの応答を取り上げて、生徒と幼児の交流を深めさせた。